

## 中日伝統芸能の継承について —梅蘭芳の初めての上海公演を例に—

梁

媚\*

### 1. はじめに

19世紀中後期、上海では租界<sup>1</sup>に頼った経済的、政治的な特殊な枠組みが確立された。戯曲作品の上演場所は上海の内城から租界に向かい<sup>2</sup>、広東路、福州路の一带に最も集中している。また、舞台の構造においても、近代化・西欧化の波を受けた。1867年以降、京式茶園のような上演場所が陸続と登場し、上演が盛んに行われる。例えば、「清代北京営業劇場復原図」<sup>3</sup>に示されている北京茶園の構造を見ると、1階の座席は露天で、柵で囲まれた場所に長椅子が多く並んでいる。2階には長椅子と四角いテーブルが設置されている。しかし、20世紀に入ると新舞台<sup>4</sup>の登場によって大規模公演が本格的に開始された。そのほか、1911年には上海を代表する京式茶園である丹桂茶園<sup>5</sup>が新式の舞台として改良され、丹桂第一台<sup>6</sup>と改名し開設された。英国人の設計による2階建て鉄筋コンクリート構造で、大きな舞台が備えられ、電灯が導入された。それまでに比べ格段に明るくなった照明によって、昼夜を問わず上演できるようになった。また、このような照明器具の変化は、俳優の演技や大道具をはじめとする演出全般に影響を与えた。そのような背景のもとで、1913年、梅蘭芳<sup>7</sup>の初めての上海公演が行われる。

梅蘭芳は優れた京劇俳優として、数多くの注目を集めてきた。しかし、梅蘭芳に関する史料の多くは散逸したため、現在使用される史料は限られ

ている。とりわけ、梅蘭芳が最も活躍した時期、1910年代から1930年代までの史料の整理はまだ不十分である。

一方、近年、清末及び民国時代の戯曲の史料文献については、谷曙光氏によって研究されている。例えば、2015年に出版された『梅蘭芳老戲單圖鑒：從戲單探究梅蘭芳的舞臺生涯』<sup>8</sup>には、梅蘭芳の1912年から1960年までのチラシの一部が収録されている。それによって、梅蘭芳の活躍した時代について知ることができる。近年の研究の動向では、こうしたチラシなどの史料が、研究者の視線を集めつつある。

よって本稿では、梅蘭芳の初めての上海公演のチラシや契約書を読み解き、その史料적意義について検討するとともに、京劇の近代化および伝統芸能の継承について考察したい。

### 2. 梅蘭芳の初めての上海公演について

1913年、上海丹桂第一台は19歳の梅蘭芳を招待して公演し、梅蘭芳は一躍有名になった。その時の公演について、穆儒丐の小説には、「今見蘭芳登了台，早把那戲園充滿，那戲園主人卻會作生意，預先把蘭芳小照印了好幾萬張，分送各座。那些女客，都把他懸在前襟」<sup>9</sup>（梅蘭芳の初公演の情報を聞き、戲園は大入り満席である。経営者は事前に何万枚の梅蘭芳の写真を印刷して、それぞれの来場客に配布した。女性客は梅蘭芳の写真を首にかけて飾りとする）という記述がある。ここからも、梅蘭芳の人気を窺うことができる。

\*お茶の水女子大学・院生

## 2.1 上海公演のチラシについて

チラシからも豊富な情報を知ることができる。例えば、チラシには、公演の具体的な時間、上演の場所、演目、俳優の名前などがはっきりと記載されている。また、各時期の俳優の地位や各地の人々が好む劇種や演目、各劇場の営業状況なども、チラシを通じて知ることができる。

「1913年上海丹桂第一臺梅蘭芳第一次「壓臺」戲單」(図1)<sup>10</sup>は、谷曙光が2005年に出版した『梅蘭芳老戲單圖鑑：從戲單探究梅蘭芳的舞臺生涯』に掲載されている。以下、その時の史料（一枚摺のチラシ）から、当時の興行体制について具体的に確認していきたい。



図1 1913年上海丹桂第一臺梅蘭芳第一次「壓臺」戲單

まずチラシの掲載内容を、以下に示す（各部分の語訳の有無について、○：全部、△：一部、記号なし：翻訳無し、とした）。

### 【興行時間○】

- ①癸丑年十月十九日：1913年10月19日
- ②夜戲：夜の部
- ③日戲逢禮拜日六准演：土日には昼の部を上演する。

### 【演目（作品）○】

《九龍柱》、《三進士》、《搖錢樹》、《三娘教子》、《割髮代首》、《紅梅閣》、《斬黃袍》、《瓊林宴》、《大溪皇莊》、《戰樊城》、《穆柯寨》、《男女滑頭》

### 【役者リスト△】

《九龍柱》：邱連奎、郭明友、胡百福、徐均培  
 《三進士》：李冠卿、高玉喜、韓桂卿、陳連仲、凌桂雲

《大溪皇莊》：譚永奎、粉菊花、八歲紅、蓋叫天、李德山、張春海、李春棠、祁彩芬、月月紅、王瑞雲、小寶翠、武國起、胡燕雲、吳春來、章佩秋、周五寶、張雙鳳、陳慶芳、凌桂雲、張永華、柴根生、史慶華、李文成、劉廷貴、張永祥、於福和、胡四喜、邱連奎、陳連仲、徐均培、張吉廷、蘭清棠、王鉄兒、楊慶吉、金起發、蕭文元、林全祥、徐金生、劉鎮山、孟鴻林、圖太全、趙來運、大老五、陸雙喜

《戰樊城》：王鳳卿、明海山、高玉喜、高慶珍、謝月至、克秀山、韓桂卿、胡百福

《穆柯寨》：梅蘭芳、劉壽峰、朱素雲、郎德山、李春棠、高玉喜

《男女滑頭》：李少棠、月月紅

### 【消費行動△】

軽食：お菓子、果物、お茶、  
 その他：手ぬぐい

### 【チケット・種類・値段】

まず興行期間の記載として、「癸丑年（1913年）十月十九日夜戲」、「日戲逢禮拜日六准演」とある。これは、土日には昼間に公演をする、十月十九日火曜日には夜間上演がある、という意味である。平日は、仕事帰りに舞台を見に行く人が多い。土日であれば、時間は自由なので昼間から上演できる。照明器具の変化により、夜間上演が行われるようになったことが、チラシの上でも確認できる。

次に、俳優の名前の記載の仕方に、中国語で「叫座」と呼ぶ、舞台の運営上から見たランクが表現されている。すなわち、利益を上げるため、効果的にチケットの販売促進を行うための表現である。たとえば、ランクが高い俳優名は横書きで

ある（梅蘭芳・王鳳卿）。それに次ぐ俳優名は△形表記である（明海山・朱素雲）。そして、それ以外の俳優名は縦書きになっている（劉壽峰・郎徳山）<sup>11</sup>。横書きの俳優名は、北京から招待された王鳳卿と梅蘭芳のみで、この二人が別格に位置づけられていたことがうかがえる。王鳳卿は梅蘭芳の師匠である。

また、お菓子、果物、お茶、手ぬぐいを販売している。しかも、チップはお断りするという記載がある。

そのほか、演目ごとに配役が記載されている。主要でない役まで全部チラシに掲載している。これは俳優を尊重した表現であると見られる。



圖2 1916年北京雙慶社吉祥園戲單

このチラシと同時期の北京での京劇公演のチラシとを見比べてみる（図2）<sup>12</sup>。日付の表記は上海と異なり、旧暦でなされている。上海での公演では夜間公演があったが、ここでは昼間上演しかない。それから、俳優より具体的な演目の表記が大きく、こちらの方が注目されていることがうかがえる。そして、梅蘭芳はここでは縦書き表記のみで、その他の俳優と比べてランクは変わらない。

以上から、上海公演では暦の表記や夜間公演の開始など新しい体制への対応がなされたこと、俳優への注目が高まったこと、そしてそのなかで梅

蘭芳が特別な扱いを受けたということが指摘できる。ここでは詳細は述べないが、日本でも明治期には、それまでは俳優の格付け順だった番付における配役の表記が、場面ごとに記されるようになるなど、「改良」がみられた。

## 2.2 上海公演の契約書について

次に、この時の契約内容について見てみよう  
(史料1)<sup>13</sup>。

【翻刻】 まず翻刻をあげる。

## 立合同據

上海丹桂第一臺洽記公司總經理許少卿煩友中（王月芳、茹萊卿、蘄德忠、雷少臣），聘梅君蘭芳到上海第一臺演唱。憑中三面言明：每月包銀連場一應左內，計洋一千八百元扣足卅天為期。每逢禮拜日，日戲登臺。自登臺日起算，期滿之後，另行商議續接。管接、管送、管住、夥食，立據日當付定洋五百元，不另立收據。余洋俟七月中再付，八月準演，萬不能遲誤，決無異言。恐無憑，立此合同據存照。

十月九號付票洋壹仟三百元正

民國二年陰曆四月廿五日（陽曆五月卅號）

## 立合同據

上海丹桂第一臺洽記公司總理許少卿囑中人（王月芳、茹萊卿、蘄德忠、雷少臣）立

【現代語訳】これを日本語に訳してみる。

総経理許少卿は友人（王月芳、茹萊卿、蘄徳忠、雷少臣）を仲介人に、梅蘭芳を上海旦桂第一台の劇場での公演に招聘する。仲介人の立会いを求め、合意に達した。すべての費用（送迎・宿泊・食事代）を含めて、毎月（30日間）大洋（貨幣の種類<sup>14</sup>。大洋は全中国に流通している）1800圓の出演料を支払う。梅蘭芳は、日曜日以外の日は夜間に出演し、日曜日のみ昼間から出演する。出演日から起算し、期限が切れたら、再契約のことを協議する。送迎・宿泊・食事付き。契約締結当日、保証金として大洋500圓を支払い、この費用は別

途領収書を発行しない。残りの給料は7月中旬に支払う。8月から時間通りに公演を開始する。問題を起こさないように、公演の開始を遅延しないように。許少卿、仲介人、梅蘭芳の三名は契約内容に対して特に異論はない。口頭の約束だけでは証拠にならないから、一札入れる次第である。

10月9日に大洋1300圓を支払う

民国2年旧暦4月25日（新暦5月30日）

契約は、上海丹桂第一台（洽記会社）総経理許少卿が仲介人（王月芳、茹萊卿、蘄徳忠、雷少臣）に依頼して締結された。

この史料は、上海旦桂第一台の総経理（社長）許少卿が仲介人（王月芳、茹萊卿、蘄徳忠、雷少臣）に依頼して、俳優側と締結した出演契約書である。この史料から以下の点が指摘できる。

第一に、出演契約は劇場の総経理（社長）と俳優との間で結ばれる。その際に、仲介人が介在する。これは、当時の契約の観念を知る上で重要な論点である。しかし、総経理と仲介人との関係は不明である。

第二に、契約は月単位で行われ、期限がきたら再契約がなされる可能性がある。

第三に、昼間公演の記載がある。観客はサラリーマンが多いので、時間が自由な土日に昼間公演がある。このことから、観客の生活時間に合わせて上演時間が設定されていることがわかる。

第四に、契約金額は公演前に決められており、出演料のほか送迎、宿泊、食事代も含まれる。

第五に、支払いは分割で行われ、公演前に500圓、公演後に1300圓が支払われる。1920年当時は、1圓で30キロのお米を買うことができた。

第六に、陰暦と陽暦の両方の記載があり、暦が新旧交代する時期であったことへの配慮がなされていることがうかがえる。

以上の点から、上海では劇場を運営する「公司」の「総経理」が総括責任者となって、劇場の経営と出演する芸能者の管理を行っていたこと、また

出演俳優に報酬を平均分配する方式を採用せず、個々の俳優との契約によって報酬を支払う方式が確立していたことがわかる。

### 3. おわりに

芸能は芸術と違い、創造・独創より保存・継承することが重要な文化である。とりわけ、19世紀末から20世紀へと移り変わる激動の時代を生きた名人たちは、いわゆる古い伝統を受け継ぐ一方で、新しい文化や制度の影響を受けながら、伝統芸能のあり方を模索した。

梅蘭芳が初めて上海で公演したのは、ちょうど新しい制度が取り入れられようとしていた時期である。本稿で紹介したような「戯単」や契約書を分析することで、宣伝や契約といった側面から、移行期への対応を模索する伝統芸能の近代化の一端を窺うことができる。

なお、同時期の北京と上海のチラシに見られる相違点については、単なる近代化の問題だけではなく、同時期の北京と上海の都市社会の違いにも考慮する必要がある。これは今後の課題としたい。

#### 注

- 1 1845年11月の設立から1943年8月まで100年近く続いた。共同租界と各国専管租界となった。
- 2 張偉品「20世紀の京劇の動きと西洋文化の影響」、上海戲劇学院学報第189期、2016年、16頁参照。
- 3 李暢『清代以来的北京劇場』、北京燕山出版社、1998年、図八「清代北京營業劇場復原図」参照。
- 4 1908年、日本の新富座をモデルに建設された「新舞台」が上海初の額縁型舞台である、現存しない。
- 5 丹桂茶園の絵画は、『點石齋畫報・和尚治遊』、清光緒十年（1884）八月上旬第十五號に掲載。
- 6 清宣統二年十二月十五日（1911年1月15日）に義記会社許少卿が創設し、1930年に廃業した。上海英租界（公共租界）四馬路大新路口（現在の福州路湖北交差点）に位置し、上海の京劇劇場の一つであり、金桂軒、天仙、大観園と並んで上海京劇茶園時代の「四大劇場」の一つである。
- 7 梅蘭芳（1894年10月22日-1961年8月8日）が創設した「梅派」芸術は、京劇の旦行（男が女役を演じ

る役、歌舞伎でいう「女形」ということ)の中で最初に形成された流派であり、京劇流派に極めて大きな影響を与えた。京劇界の梨園世家譜では、梅家は梅蘭芳が第三代、梅蘭芳の九人目の息子である梅葆玖が第四代である。一方、京劇梅派芸術の第三代は2001年に梅葆玖の弟子である胡文閣に継承された。現在は北京京劇院梅蘭芳京劇団の主演を務めている。

- 8 谷曙光『梅蘭芳老戲單圖鑒：從戲單探究梅蘭芳的舞臺生涯』、学苑出版社、2015年。
- 9 穆儒丐『梅蘭芳-穆儒丐孤本小説』、陳均編、釀出版、2012年、78頁参照。
- 10 注8書13頁に記載。
- 11 出演者紹介の順番について、谷氏は優伶の名前は立っている（縦に書く）、座っている（三角形に書く）、横になっている（横に書く）3種類に分けられ、重要性は順番に表示されることを提案している。注8書16頁参照。
- 12 注8書15頁に記載。
- 13 經之・如辰編『百年巨匠・梅蘭芳』、文物出版社、2019年、40頁に記載。
- 14 2月7日、北京政府は『国幣条例』及び『施行細則』（国幣条例）を公布し、銀（元）本位制を採用すると規定した。（龔育之・ほか編「2月7日北京政府頒布《國幣條例》及《施行細則》」『中國二十世紀通鑒』、線裝書局、1920年、776-777頁）。